『イスラームと女性』

～イスラーム的女性解放～

ハビーバ中田香織
「アッサラーム」第６５、６６号掲載

一般にイスラームは女性抑圧の宗教と信じられている。ここでは、そうした偏見にムスリマの立場から、クルアーンとハディースという２つの聖典に拠りながら反駁すると同時に、今日のフェミニズムにいかに間違った方向に女性たちを導きつつあるかを示したい。

フェミニズムは伝統的、あるいは宗教的な価値観に則った女性像に疑問符を突き付け、過去の女性たちをその抑圧的な枠組みに閉じ込めて来た「女性たるもの」から解放することを目指す。ただ、そうした運動が過去の価値観を否定し、新たな女性像を思い描くときに根拠としうるものは、当然のことながらなにもない。「女性」のどこまでが生得的でどこまでが文化的かを見極め、女性の本来あるべき姿を探り当てることは困難を極める。
こうした困難を抱えるのはフェミニストだけではない。神を見失った現代人は、過去の伝統的（宗教的）倫理観を身を引き剥ぐように切り捨て、「自由」を追い求めたが、その結果手にしたのは、糸の切れた凧のような当てもない暴走だった。

「正しい」ものはなにもない。倫理は拘束性を失い、「時代」が正当化に用いられるようになった。「愛」の形も様々に変容した。結婚から同棲に。異性愛から同性愛に。父と母と子という家族単位は解体し、生涯独身、あるいはシングルマザーに。夫婦の貞操から不倫に。かつて男女の結び付きには子供の誕生が伴ったが、今では生まないという選択肢もできた。ありとあらゆる形が試され、ありとあらゆることが許されるようになったかわりに、どれが正しいのか、どれが自分の幸福になるのかという判断の拠り所を失った現代人は、ただひたすら「愛」という言葉にすがり、「だってそうしたいんだもの。」あるいは「みんなだってやっているじゃない。」と己の欲望と周囲の情報に振り回されながら迷走する。もちろん、今日の選択は明日の後悔、となることも少なくないだろう。

こうして過去の倫理の束縛から逃れ、新しい性の在り方を追求する者たちに、伝統的価値観の擁護者たちの警告や嘆きは届かない。彼らの言葉はなんら説得力を持たない。根拠がない点では、彼らも伝統的価値を否定する者と同じだからだ。「同棲、同性愛、非婚、未婚の母のどこがいけないのか。なぜ子供を生まないという選択をしてはいけないのか。誰にも迷惑はかけていない。」と言われれば言葉に窮するよりない。若者たちは、外からの価値観を無条件に受け入れていた年齢を過ぎ、時代や場所に左右される伝統的価値観に絶対的な根拠はないのだということに気づいた時、大人たちの欺瞞に憤り、過激な否定に走る。
これが神を知らない者たちの不幸である。

イスラームの女性観は、多くの点において伝統的女性観と一致している。偏見を持った者の目には、それは伝統的女性観の中でも最右翼と見えるに違いない。イスラームにおいては女性は一人の人間としてより妻として母として規定され、夫に従属し、所有され、個人としての開花を奪われた存在であり、それを端的に象徴するのが女性の身を覆うヒジャーブである、これがイスラームに関する一般的な理解だろう。実際、イスラーム圏の女性の現実を見れば、それを裏付けると思われてもしかたのないような事例が多々見られる。しかし、そのような現実はイスラーム以前の古い男性中心主義的な慣習がいかに根強いかを示すものであり、その唾棄こそ実はイスラームが説くところなのである。いわば、イスラームははるかに時代を先んじたフェミニズムだったのである。ただ、イスラーム的フェミニズムは女を創造し給うた神が説き、推進するものであったから、無知な人間が模索する「女性性」を抑圧するような今日のフェミニズムとはまったく異なった方向性を示している。

伝統的価値擁護者にしろ新しい価値の推奨者にしろ己の主張の根拠となるものを持たないのに対し、イスラーム的女性観を支持する者には、「それは神がそう創り、そう定められたから」という

強固な裏付けがある。

言うまでもなく、これは信仰のない者には無意味な根拠である。無神論的フェミニストの論駁がここでの目的ではない。ただ、伝統的女性像をヒステリックなまでに否定し、新しい女性の在り方を闇雲に模索し続ける今日の女性たちに、第３の選択としてイスラーム的女性像を選ぶ可能性があることを、ぜひ知ってもらいたい。イスラームが伝統的女性観とも今日のフェミニズムとも違った独自の、そして本来あるべき女性像をはっきりと私たちに示していることを知ってもらいたいのである。

イスラームを女性抑圧の宗教だと考える者は、今日若い日本人女性が　ー多くはイスラーム圏からの外国人労働者との結婚を契機にー　続々とイスラームに入信している現象を一体どう捉えるのだろうか。愛する夫の宗教がイスラームだから形式的に入信した、という消極的な受け止め方に留まる女性が大半だろうが、もっと積極的にイスラームを「自分の宗教」として受け入れ、喜々として「自由」を捨て、さまざまな「拘束」に身を任せている女性も無視できない数に上る。これは、もともと彼女たちが夫の具現するイスラームの教えに引かれたためだろうが、さらに言えば（それと重なり合うことだが）彼女たちはムスリム男性の持つ「男らしさ」に引かれたのではないだろうか。男女平等の名のもとに男女の性差が最小限にまで縮小評価され、男としての責任を回避する男性たちに囲まれながら男並みであることを要求される今日の女性たちが、ムスリム男性の「男らしさ」に触れ、それまで自分のうちで押さえ殺していた「女性らしさ」の受け止め手をそこに見いだし、安堵したのではないだろうか。
男は男らしく、女は女らしく、それがイスラームの教えるところである。

クルアーンとハディースの示す男女の成り立ちと関係

クルアーンによれば、すべてのものは番（つがい）に創られ、夫と妻が慈しみ合うのもアッラーの徴にほかならない。

『大地から生えるもの、彼ら自身、そして彼らの知らないものもすべて雌雄に創り給うた方のいと尊きかな。』（第 36 章［ヤーシーン］36 節）
『彼こそは一個の魂からおまえたちを創造し、そこから妻を造り、彼女の許に安住させ給うた方。』（第 7 章［高壁］189 節）

『おまえたち自身からおまえたちのために同棲する妻を造り給い、おまえたちの間に情熱と同情の心を設け給うたのも彼（アッラー）の御徴のひとつである。』（第 30 章［ビザンチン］21 節）

『おまえたちのうちの独身者、またおまえたちの男女奴隷のうち善良な者は結婚させよ。たとえその者が貧しくとも、アッラーはお恵みによって彼らを富ませ給うであろう。まことにアッラーは広大にして、あまねく知り給う。』（第 24 章［御光］32 節）
『彼女ら（妻）はおまえたちの衣であり、おまえたちは彼女たちの衣である。…』（第 2 章［雌牛］187 節）

「衣」の比喩は、夫婦のエロティックな関係を実に詩的に表現している。また、別の箇所では、妻は畑に譬えられている。
『妻はおまえたちの耕地である。それゆえ意のまま耕地に赴くがよい。』（第 2 章［雌牛］223 節）

女を生殖のための道具とみなし、物質化し所有物化している、と目くじらを立ててはいけない。農夫は畑を精根込めて耕し、種を蒔き、日夜手を入れて慈しむ。ここには夫婦のほのぼのとした牧歌的なイメージがある。

キリスト教や仏教には、霊的向上、神への奉仕にとって肉の営みは障害であるとみなす考えがあり（パウロ　ー「男は女に触れないにこしたことはありません。」［コリント第１ー７：１］、「未婚者とやもめに言いますが、皆わたしのように一人でいるのがよいでしょう。」［同７：８］）、そのように性を厭う宗教は必然的に女性を厭う傾向を合わせ持つが、イスラームには性を否定的に捉える傾向はまったくなく、むしろ、「結婚した者は宗教義務の半分を果たしたことにな

る」（アル＝バイハキーの伝える伝承）という預言者（彼に平安あれ）の言葉が示すように、結婚は信仰生活の重要な一部であり、禁欲的独身主義の方がかえって悪とみなされている。信者の男たちがある時、「私は結婚しない」、「私は肉を食べない」、「寝台で寝ない」などと信仰熱心なあまり禁欲主義的傾向をみせたとき、預言者（彼に平安あれ）は、「そのようなことを言う者がいるとは一体どういうわけか。私は礼拝をすれば眠りもする。断食をすれば食事もする。もちろん女性とも結婚する。私のこうしたスンナ（慣行）を無視する者は私とは関係ない者である。」と言ってはっきり禁欲を否定しておられる（ムスリムの伝える伝承）。

～イスラームにおける結婚～

ハビーバ中田香織
「アッサラーム」第６５、６６号掲載

イスラームが男女の結び付きを肯定的に捉え、非常に積極的な意味を付与していることが確認できたところで、イスラームにおける結婚のありかたについて考察してみたい。

見合い結婚

身内以外の男女の接触を最小に制限するイスラームにおいては未婚男女の自由交際はありえない。したがって結婚はほとんどの場合が見合いで始まる。日本でもかつては見合い結婚が主流だったが、今ではすっかり廃れ（とはいえ最近の結婚難から新しい商売として「見合い」業が流行っているらしいが）、若い女性のだれもが「結婚相手は自分で選ぶ」と息巻き、見合い結婚が愛のない結婚であるかのように「恋愛」にこだわる。イスラームが「野蛮な、個人の自由を無視した」宗教と誤解される理由の一つも、原則的に自由恋愛を認めないところにあるようだ。しかし、イスラーム式の結婚に多くの英知が隠されていることは、少し冷静に検討してみればすぐにわかることである。

まず、「見合い結婚、イコール愛のない結婚」という図式は明らかに誤りである。見合いと恋愛の違いは出会いが人工的か偶然かの違いに過ぎない。あとの心理はどちらも同じようなものである。相手が気に入ればたちまち恋に陥り、普通の恋愛同様に胸をときめかせたり、胸を痛めたりするのである。

見合いの方はもともと物理的条件が揃っているから、この人と結婚したいという気持ちになった後の手順が容易だが、恋愛の場合は、その後２人が一緒になるための諸障害に対処しなければならないため、往々にして困難を伴い、乗り切れずに破局となる場合もある。また、見合いの方は結婚を意識したうえでの交際であるため、双方とも真剣で結論も早く出るが、恋愛の場合は遠回しに相手の真意を探るところから始めなくてはならず、結婚を意識し合うようになるまでに多くの時間と、さまざまな心理的駆け引きのための精力を費やした上、往々にしてそうした努力は不毛に終わる。

よく知りもしない相手とよくも結婚できるものだ、と思うかもしれないが、よく知り合った上で踏み切った結婚が失敗に終わることが現実にはたいへん多い。「私にはこの人しかいない」と思った恋愛もいつか冷め、しばらく後には別の相手に対し同じような感情を抱き始める。「愛」の手形がいかに不確かなものかがよくわかる。

人は３回も会って話せば相手がどんな人間かは見当がつくもので、その判断は大抵の場合間違いない。男と女は本質的に引かれ合うようにできているから、よほど相性が合わない二人でない限り、共通の時間をいくらか過ごせばほとんど必ず相手を異性として意識し、愛着を覚えるようになるものなのである。ムスリム夫婦の愛は、まず同じ神を信仰する兄弟姉妹としての愛を土台とし、そのうえに夫婦としての絆に結ばれる。「夫婦として」とは、単に男女が一対となることを意味するのではなく、夫は妻に対し、妻は夫に対しそれぞれ神の命じ給うた義務を負った者同士として向き合うということである。夫婦とは個人的な関係に留まるものではなく、宗教義務を果たす場でもあるのだ。結婚が信仰の半分といわれるのもそのためだろう。

イスラームでは身内以外の男女が接触する機会は最小限に押さえられるから、妻にとって男は夫よりなく、夫にとっても女は妻より他にない。それゆえ、男が女に覚える吸引力、女が男に覚える吸引力はもっぱら夫婦の間で働く。恋愛のように強い感情は最初はないかもしれないが、時を重ねるにつれ、夫婦の愛は確実に深まり、互いになくてはならない存在となっていく。ムスリムは神の定められた宿命を信じるから、結婚する相手は常に「宿命の人」である。

見合いによって成立するイスラーム式の結婚には親の意向が強く反映され、結婚は愛情問題というよりは財産、家柄の問題として処理され、本人の意向を無視した強制結婚もしばしばである、という話を聞く。多分に事実であることは確かだが、それはイスラームの慣習ではない。確かにイスラームでは結婚契約を取り交わすのは妻の保護者である父と夫と定められているが、それは女性の意志が無視され、物のように取り交わされるいうことではない。「既婚の女性はその意向を尋ねてからでなければ嫁がせてはならず、また処女はその同意を得てからでなければ嫁がせてはならない。...」（アル＝ブハーリーの伝える伝承）とはっきり預言者は言っておられる。ある時、預言者（彼に平安あれ）の元に若い娘が来て、「父が私を甥と結婚させようとしていますが、私は彼を嫌っています」と訴えると、彼は、決めるのは彼女自身だ、と答えられた。すると娘は、「では私は父の決定を受け入れます。ただ、私は女性たちに、親がこの件（結婚）に関し強制する権利がないことを知らせたかったのです。」と言ったと伝えられる。また、よく誤解されることだが、夫からの結婚金は妻の家族に女性を買い取るような形で与えられるものではなく、妻個人に贈り物として贈られるものである。

すでに結婚している相手と肉体関係を持つことは一般的な倫理観からして許されないことだが、実を言えば人を好きになるのに未婚も既婚も関係ない。男女が自由に接触する状況にあっては禁じられた間柄の間に禁じられた感情が生まれることは避けられないのである。だからこそイスラームは賢明にも、男女が禁じられた感情に苦しむようになる以前にそのような感情の生まれる機会を作らないように命じているのである。女性の美を隠すヒジャーブ（覆い）もまた、一つにはそのような目的から定められたに違いない。

～ヒジャーブ～

ハビーバ中田香織
「アッサラーム」第６５、６６号掲載

『男の信者たちに言え、視線を下げ、貞潔を守れと。その方が彼らにとっては清廉である。アッラーは彼らのなすことをご存じである。また、女の信者たちに言え、視線を下げ、貞潔を守れ、そして自ずと現れるもの以外は己の身の飾りを現すなと。また、彼女らは覆いを胸まで垂らすように。己の身の飾りを現してはならない、夫、父、夫の父、自分の息子、夫の息子、兄弟、兄弟の息子、姉妹の息子、自分の女たち、右手に所有する者（奴隷）、欲望を持たない男の従者、あるいは女の秘所について知らない幼児に対するほかは。...』（第 24 章［御光］30、31 節）

『預言者よ、おまえの妻たち、娘たち、また信者の女たちに言え、長衣を纏うようにと。そうすれば見分けがつきやすく、危害を加えられることがないであろう。』（第 33 章［部族連合］59 節）

クルアーン中のこれらの節は、ムスリマが身内の結婚対象となりえない男性を除きすべての異性に対し身を覆わなければならないことを命じている。「成人に達した女性は、ここを除きどの部分も見られてはならない、と言って預言者は顔と手を示された。」というハディースもある（アル＝バイハキーの伝える伝承）。女性の性的魅力は夫に対してのみ発揮させるべきなのである。妻は夫のために身を飾り、夫も妻のために装う。一体これが「抑圧」だろうか。

誤解されていることが多いので補足すれば、体を隠さなければならないのはなにも女性に限らない。隠すべきとされる部分は異なるが、男性も「恥部」、すなわち臍から下、膝から上は隠さなければならない。アラブの男性の民族衣装がタブッとした上着であるのも、男性の象徴をあからさまに誇示しないためだろう。

また、秘所を隠さなければならないのは、異性の他人に対してだけではない。女性同士、男性同士でも秘所は隠しあわなければならず、それは親子といえどもかわりない。これは別に裸体（肉体）を卑しいもの、汚れたものとみなしているということではなく、「羞恥」という非常に人間的な、文化的な感情を尊重するためであろう。『信仰する者よ、おまえたちの右手の所有する者と身内の未成年者には３つの時間には（部屋に）入る許しを求めさせよ。暁の礼拝前、真昼に脱衣している時、夜の礼拝後、おまえたちが素肌でいる３つの時間である。…』（第 24 章［御光］58 節）、「あなたがたの誰でも妻のところに行くときには恥部に注意しなさい。服を脱ぎ捨て猿のように素裸になるべきではありません。」（イブン・マージヤの伝える伝承）、「男は誰も裸の男を見てはならず、女は誰も裸の女を見てはなりません。」（ムスリムの伝える伝承）

この「恥の心」、これこそが人間を人間らしくするものだ。海辺でビキニ姿になる女性がなぜ同じ格好で町の中を歩かないのか。人間の裸体が自然のものならなぜ服を脱ぎ捨てないのか。モラルを信じられなくなった現代人は、羞恥心を習慣によって受け継いだ無意味な感情とみなし、無理やりにもそれをはぎ捨てようとし、我も我もと裸に近い格好を晒すようになった。そしてそれを「解放」だと勘違いしている。

話を結婚に戻すと、自分で結婚相手を見つけなければならない今日の女性は、不特定多数の男性に対し、自分の性的魅力をアピールし、いわば「商品」として売り込まなければならない。そのため、若い未婚女性は自分の容姿にひたすら心を砕き、鼻が低いの、目が小さいの、髪が強いの、足が太いのに小さな胸を痛めなければならない。外見に自分という人間の評価が集約されるかのような有り様だ。

自己アピールのための美の追求はともかく、最近の女性は娼婦とまごうばかりの露出度の高い格好をしている。彼女たちにそこまで己の「女性性」をアピールさせているのはなにか。女として特別扱いされることを嫌い、あらゆる分野において男並みの働きをする女性が増えている一方で、「私は女よ」となぜあれほどまでに声高く彼女たちは主張しなければならないのか。女性の身体的特徴をあのように強調するのは、貞淑さを要求され、性的魅力を包み隠さなければならなかった過去の倫理観から解放され、自分の肉体を取り戻した彼女たちの凱旋の表現だろうか。女性があのように自分の体をオブジェ化して男の眼前に晒すのは、むしろ女性性の疎外に苦しむ彼女たちの無意識の叫びのような気がしてならない。「どうか私を女と認めて」という悲痛な叫び声が聞こえて来るような気がする。

いずれにせよ、（人間としての）内面よりも（女性としての）外見が評価される今日の風潮の根底に女性差別がないといえないことは確かだ。むしろヒジャーブによって女性的部分を隠したムスリマの方が、ずっと「人間として」男性と向き合っている。イスラーム世界では、女性が「職場の花」を演じさせられたり、「お茶くみ、コピー取り」といった男性社員の補助に回されることはない。かわいい子ぶって愛想笑いする必要もなく、新車の横に裸同然の格好で立たされることもない。どちらの方が女性を尊重しているか、一見して明らかではないか。

男と女の間に一線を引くイスラーム世界では、男の世界と女の世界がはっきり分かれている。男性が社会の中心にあり、女性が片隅に追いやられているのではなく、２つの別の世界を構成しているのだ。「男は仕事に、女は家庭に」、これがイスラームにおける原則的な男女の役割分担だが、それは女性に活動の場が奪われていることを意味しない。今日は「専業主婦」という立場がずいぶん低く評価され、出産によってやむなく退職した女性が、まるで夫の付属物になってしまったようなあせりと、社会から取り残されたような孤立感を味わう、という話はよく耳にする話である。確かに小さなアパートで外との接触もなく一日中子供を相手に明け暮れていれば、「一体私の人生って何」という気持ちになってくるのもわからないではない。しかし、自己の実現のためにはなにも収入を伴う仕事に従事する必要はないのである。職場において自分にしかできない仕事のできる女性は多くないだろうが、家庭では自分にしか果たせない妻として母としての役割を果たすことができるし、生活の心配がない分、儲けぬきで人の役に立つ社会福祉活動に心置きなく従事できる。若い専業主婦が自分の居場所を見いだせないのは、女性の世界がないからだろう。イスラームにおいて女性は家族、親類、隣人といった横の関係をつなぐ核として欠かせない役割を果たす。今日、高齢化社会の到来と共に老人福祉の問題が深刻化しているが、こうした分野にこそ女性の力は発揮されるべきではないか。主婦は人と人の繋がりを結ぶ重要な分子の役割を果たすべきなのである。そして、そうした主婦の労働はもっともっと社会的に高く評価されなければならない。近年日本でも

主婦のボランティア活動がずいぶん盛んになってきたようだが、女性の力はこの方向で生かされるべきだろう。男たちが取り込まれた資本主義能率主義の賃金労働システムの中に女まで無理やり参入する必要はまったくないのである。

ヒジャーブに関して補足すれば、信仰あるムスリマ（女性イスラーム教徒）は「信仰の証し」であるヒジャーブを誇りにこそ思え、抑圧の印だとはわずかにも思っていない。体のラインを隠すゆったりした上衣は、今日の若い女性が死ぬほど胸を痛める身体的コンプレックスを覆い隠してくれるし、サウディアラビアや原理主義者と呼ばれる女性たちが着る全身をすっぽり覆う黒衣になると、貧富の差や年齢までも隠してくれる。媚を振って歩く必要もなければ、「女らしい」座り方をする必要もない。
服を着ていようといまいと、壇の上だろうと路上だろうと、程度の違いこそあれ「性を商品化する視線」は今の社会の至る所にあるし、どんなにフェミニストたちがいきり立っても決してなくならないだろう。そうした視線から女性を守れるのはヒジャーブしかない。蜂蜜の皿に蓋もせず外に晒しておきながら、寄って来る蝿に「いまいましい」と苛立つのは愚かしいことだ。
イスラーム教徒の女性が「ヴェールを脱ぎ捨てて解放される日」は決して来ないだろう。女性の真の解放の鍵はむしろヒジャーブにある。現にヴェール回帰現象は高等教育を受けた若い女性を中心に急速に広がっている。そして西欧でも現代の西欧型女性像を究極の女性像としてイスラーム圏の女性に押し付けることの間違いにそろそろ気づき始めたようだ。

～男女の差異と不平等～

ハビーバ中田香織
「アッサラーム」第６５、６６号掲載

男女の差異

今日のフェミニズムは男女の差異を最小限の生物学的差異にまで切り詰め、男のすることをすべて女もする権利を主張し、また女の領域とされてきたことがらに男が加担することを要求する。そして「男らしさ」、「女らしさ」、「男の役割」、「女の役割」という表現を拒絶する。しかし、自然をみれば明らかなように、雌と雄とは身体的に異なり、その身体的差異は自ずと役割分担に現れるものである。人間はそれぞれ気質も能力も異なり、その意味では不平等である。男女の間にも差異はあり、不平等はある。神がそのように創られているのである。

『アッラーがおまえたちのある者をある者より多く恵み給うものをうらやんではならない。男たちにはその稼ぎに応じて分け前があり、女たちにはその稼ぎに応じて分け前がある。アッラーの恵みを求めよ。まことにアッラーはあらゆることを知り給う。…男は女の擁護者である。アッラーが一方に他方より多くの恵みを与え、彼らが自分の財産から（扶養のための）経費を出すゆえに。』（第 4 章［婦人］32－34 節）

『…女たちには彼女らが義務として負うのと同じだけよくしてもらう権利を持つが、男たちは彼女らより一段上である。まことにアッラーは威力並びなく英明にあらせられる。』（第 2 章［雌牛］228 節）

言うまでもないことだが、差異を認めることは優劣を付けることとは無関係である。ただ、今日の男性社会において女性が男性と同じ土俵で勝負しようとすれば、当然女性は劣った者という評価を得ることになる。そして妻、母の役割はハンディーキャップとならざるを得ない。男女の不平等解消は、女にも男並みのことができることを立証し、認めさせることによって果たせるものではなく、女には女の土俵があるのだということを男に認めさせたときにこそ果たせるのではないか。

主導権

夫は妻に対しリーダーシップを負い、妻は夫にリーダーシップを委ねる。これは神によって定められた秩序である。人間はそれぞれ考え方が異なり、話し合っても意見が一致しないことも多々あ

る。「３人の者がいるときには１人がリーダーになるべきです。」（ムスリムの伝える伝承）とあるように、リーダーを定め、その者に最終決定を委ねることは事を円滑に運ぶためにとても有効なシステムである。夫と妻の間では夫がそのリーダーシップを司る。これは夫の身勝手な言い分に妻がただただ服従しなければならないという独裁体制の正当化では決してない。現実にはこれを男の都合のいいように解釈する男性ムスリムが少なくないが、ムスリムの模範である預言者ムハンマド（彼に平安あれ）は、以下の例に見るように、妻たちに対し男として、あるいは夫としての権威を振りかざし、己の意志を一方的に妻に押し付けるようなことは決してされていない。
ある時、旅の途中、妻の一人サフィーヤが乗っていたらくだが病気になり進めなくなった。そこで預言者（彼に平安あれ）は別の妻ザイナブに、彼女の持っていたらくだをサフィーヤに貸してくれるよう求められたが、彼女はそれを拒んだ。すると預言者はザイナブに強制することはされず、別の解決を求められた。妻の所有物に対する権限に干渉しようとはされなかったのだ。

また、死の病に臥せっておられた預言者（彼に平安あれ）は、最愛の妻アーイシャの許を訪ねた日、「明日は誰の番だったか」と言って、アーイシャの家に留まりたいが構わないか、と暗に他の妻たちの許可を求められた。これは預言者が複数の妻たちの間を公平に扱うため日替わりで順番に訪ねることを習わしにされていたためだが、状況が状況であったから、明日から私はアーイシャの許に留まることにしたい、と宣告することもできたはずである。にもかかわらず彼は、妻たちの気持ちを配慮し、許しを求められたのである。
また、ある時、預言者（彼に平安あれ）が妻アーイシャの許におられると、別の妻サウダがスープを作って持って来た。アーイシャは（おそらく２人きりの水入らずに邪魔が入ったのが気に入らなかったのだろう）、「自分がそれを飲んだらいい」と彼女に言い放ち、サウダがそれを無視すると、「飲まないなら顔につけてやる」と言ってサウダの顔にスープをなすり付けた。それを見て預言者は笑いながらサウダに、アーイシャにお返しをしてやるといい、と言い、言われた通りサウダはアーイシャの顔に同じようにスープをなすり付け、それを見た預言者はさらに笑われた、というエピソードが伝えられる。妻たちが嫉妬から小さな争いをするのを目にしながら、夫の権限でそれを上から押さえ付けるようなことはされず、むしろ明るくその場の緊張を解しておられる。

「…あなたがたのうち最良のものは家族（妻）に最良の者です。」（アッ＝ティルミズィーの伝える伝承）という言葉が伝えられるが、実際、預言者は妻たちに優しく接せられ、妻たちは、神の使徒であり、夫である彼の傍らで萎縮するどころか実に伸び伸びと生活し、意見の主張もはっきりし、時には喧嘩することすらあった。

夫がイニシャチブを取り、妻がそれに従うという「役割分担」は、夫の有利を不平等に図ったものではない。双方にとって有利な秩序である。人間が異なれば、個性も異なり、意見も異なる。そんなときには主導権を持った方の意見に譲るという法則があると、よけいな揉め事は回避出来る。意地の張り合いからつまらない意見の相違にこだわり、無意味な言い争いとなり、互いに不愉快な思いをし、意地が意地を呼んで仲直りのタイミングを逸する、という事態を避けられる。それに実際譲ってみれば、どうでもいいことが実に多いのだ。妻が譲れば夫はそれを感謝し、妻に優しくし、妻の言い分も聞こうとするだろう。どちらが強くどちらが弱いか、どちらが優れどちらが劣るか、どちらが勝者でどちらが敗者かではない。双方のためのルールなのである。理由もなく相手に譲らなければならないとすれば不愉快だが、妻は夫に従い、年少者は年長者に従い、子は親に従い、市民は統治者に従う、という神の定め給うたルールに従って駒を進めるのだ、と考えれば、不思議と腹は立たない。「もし人間がアッラー以外に向かって跪拝を命じられることがあるとすれば、それは妻が夫に向かってそう命じられただろう。」（アッ＝ティルミズィーの伝える伝承）という言葉も伝えられるが、妻は夫に「屈服する」のではなくアッラーに服す意味で夫に服すのある。そしてそれは、先に預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）の妻たちの例を出して説明したように、夫の横暴に妻がひたすら耐える、ということを許すものではない。

妻が夫を「主人」と人前で呼ぶことに抵抗を覚える若い妻が増えているようだが、主人ー奴隷、主人ー召し使い、という対比で考えるからおかしくなるのだろう。夫は「家の主な人」であるから「主人」なのである。

イスラームにおいて女は男に義務と課された様々なことから免除されている。例えば、男には自分自身と自分の家族の生活費を稼ぐ「義務」がある。ジハードの義務がある。毎日５回の礼拝をモスクで集団で行う義務がある。毎週金曜の合同礼拝参加の義務がある。一方、生理中の女性に礼拝

の義務はなく、ラマダーン月中の断食義務も解除される。女性にとって毎月一週間前後礼拝ができないことは辛く、礼拝できる喜びを改めて思い知らされるよい機会であるが、やはり同時に礼拝の時間を気にする必要がないことは楽である。ラマダーン中に断食を解かねばならないことも口惜しいことであるが、やはり息をつく一時でもある。それに比べ男性は死ぬまで一日たりとも、一回たりとも礼拝を休めるときはない。しかも礼拝毎原則的にはモスクに足を運ばなければならない。これは大変なことである。そのこと一つをとっても「男性はえらい」と素直に認められる気持ちになる。生理中の女性が礼拝や断食ができないのは一つには女性の体を思い図った措置だろうが、このように謙虚に「男はえらい」と思わせるという効果を狙ったものなのかもしれない。いずれにせよ、アッラーの英知は私たちには計り知れないほど深い。

男と女の気質の違いが先天的なものであることは、男女の子供を育てたことのある母親にとっては自明のことである。例外はいくらでもあるが、大抵の場合、男の子の方が活動量は多く、動くものに興味を示すのに対し、女の子は赤やピンクを好み、ままごとを好む。本来「平等」とは、様々な違いを踏まえた上にこそ成り立つものであり、なにもかもを同じにしてしまうことではない。男女の差異を尊重し評価し合ってこそ男女間の平等はなるのである。そもそも、己がアッラーのしもべであり、己の財産も能力もすべて神からの預かり物であると知るムスリムは、人より何かが勝っているからといって得意然とし他人を見下すということはなく、むしろ人より多くを与えられた者の義務を重く自負するのである。夫が妻よりも力において勝ることに乗じて妻を虐げるということは決してあってはならないことである。

イスラームでは女性が国家の頂点に立つことはできない。預言者（彼にアッラーの祝福と平安あれ）は、ペルシャで王女が女王の座に着いたことを耳にし、「女性を統治者とする民は決して栄えないだろう。」（アル＝ブハーリーの伝える伝承）と言われたと伝えられる。これを女性差別と言いたければ言えばいい。ここで問題となっているのは女性の能力の問題よりも、むしろリーダーシップを女性に委ねざるを得ない男たちの無能力への非難であろう。第一、女性が統治者になれないことがそれほど大きな損失だろうか。きれいごとだけではやっていけない面倒な政など男に任せ、そのすきにもっと有益なことを能率よくやったほうがいいように思えるが、そうした考えがフェミニストには許せないのだろうか。

～姓とアイデンティティー～

ハビーバ中田香織
「アッサラーム」第６５、６６号掲載

夫婦別姓を主張する声がこのところ高まっているので、それについて一言言っておきたい。私もムスリムになる以前は結婚して姓が変わるのを嫌った。それ以前に「結婚」という制度自体にとても嫌なものを感じていた。愛に結婚という形式は必要ないと思ったのだ。イスラームに入信して私の考えは 180 度転回した。男女は結婚という目標を目指して向き合い、結婚という枠の中で愛し合うべきだと悟ったのである。

入信してまもなく私は結婚したくてたまらなくなった。そして子供が欲しくなった。それは、イスラームという真理に出会い、自分の生に初めて積極的な意味を見い出したからだと思う。子供ができたら自分が自分でなくなるのではないかというような不安はまるでなくなったし、新しい生命を世に送り出すことに対する疑問もなくなった。

また、入信し、「ハウラ」というムスリム名で呼ばれるようになって以来、私は名に対する執着をなくした。それゆえ結婚して姓が変わるのももはや大した意味はなかった。私のアイデンティティーは「ハウラ」に象徴され、「香織」だの旧姓「松岡」だの夫の姓「中田」だのはＴＰＯに合わせて変わる便宜上の呼び名にすぎなかった。「ハウラ」という名前にしても、当然愛着はあるが、明日から別の名に変えよと言われればさほどの抵抗もなく変えられるだろう。第一、男の子が生まれたら「アブドゥッラー（アッラーのしもべ）」と名付け、自分は「ウンム・アブドゥッラー（アッラーのしもべの母）」と呼ばれたいと思う（この呼び名は日本的な「タケシくんのお母さん」というのとはまったくニュアンスが異なる）。つまり私は「名前」から自由になってしまったのだ。それは、アッラーと親密で個人的な関係を結んだからだろう。名前がどう変わろうと、肩書がなん

であろうと、そんなものとは無関係に、「私」というかけがえのない存在を信じられるようになったのだ。神を信じない者は、名や家や仕事や地位や民族や国家にアイデンティティーを求める。「芸術」に賭ける気持ちの根底にあるのも同じだろう。形あるものに頼らずにはいられないのだ。しかし、アッラーに対峙する私は、そうした属性をすべて取り去った裸の「私」でしかなく、それでいて決して「無名の存在」ではない。私が「その他大勢」に埋没することは決してないのである。私が私であるためには私という人間を創造し、私を不断に見つめるアッラーに思いを馳せばそれで十分なのである。「家」という制度に縛られることを恐れて改姓に抵抗するのならともかく、単に自己のアイデンティティーのためだとすれば、つまらない拘りだと思う。名前や肩書は男に与えておいたらいいだろう。女はそんなものからすらもっともっと解放され自由になればいい。

～ムスリマはムスリムとしか結婚できないこと～

ハビーバ中田香織
「アッサラーム」第６５、６６号掲載

ムスリム男性はユダヤ教徒、あるいはキリスト教徒の妻を娶ることができるのに、女性はムスリム男性としか結婚できない。イスラームにおける男女間の不平等がここにも現れていると指摘されることがある。しかし、これは非常に理にかなった不平等なのである。イスラームにおいては信仰は心の問題に留まるものではなく、世俗的な日常の中にもそれは浸透している。また、結婚が信仰の半分、と言われるように、結婚生活が信仰に及ぼす影響は極めて大きい。宗教が異なっても互いに愛し合っていればいいではないか、では済まない問題なのである。さらにそれは夫婦間の問題だけでなく、将来的には子供の教育にも大きくかかわってくる。男性と女性では、男性の方が心が頑なで、妻の言葉に耳を傾けようとしない場合が多い。女性は夫に説得され、感化され、いつかイスラームを受け入れる可能性が高いが、逆の場合はかなり困難である。それゆえそのような困難に苦しむことのないようにと、ムスリム女性は非ムスリム男性との結婚を禁じられるのである。実際、個人的に私は非ムスリムを夫に持つ２人の女性を知っているが、どちらも信仰を分かち合えない辛さを訴え、特に子供が長じるにつれ起こってくる宗教教育について真剣に悩み、離婚の可能性を模索している。

一夫多妻

『もしおまえたちが孤児を公正に扱いかねることを心配するなら気に入った女を２人なり、３人なり、あるいは４人なり娶れ。もし妻を公平に扱いかねることを心配するなら、一人だけを、あるいは自分の右手が所有する者を娶っておけ。偏らないためにはこれが最もふさわしい。』（第４章［婦人］３節）

一夫多妻についても、男の好色を満たすために複数の女性を囲う「ハーレム」の誤ったイメージばかりが先行し、女性差別の象徴とみなされるが、その機能と制度を検討すれば、それがそのような男の性の楽園とはまったく異なるものであることがわかる。一夫多妻は、夫が強い性欲を持ち一人の妻だけではそれに応じきれない場合、最初の妻に子供ができない場合、身寄りのない女性を庇護する場合などに有効に機能する。男にのみ都合のいいシステムでないことは、複数妻の間を物理的に平等に扱わなければならないという義務が夫に課せられていることを知れば容易に理解できる。「男が二人の妻を持ち、彼女らを公平に扱わなければ、審判の日、彼は体の片側が跛で現れるだろう。」（アッ＝ティルミズィーの伝える伝承）。

夫は妻の一人を偏愛することはできず、平等に日割りして妻たちを訪ねなければならない。複数の妻の一人一人に対し「妻に対する義務」を等しく果たし、さらに彼女たちの間をうまく取り持つことは骨の折れることだろう。単なる好色を満たすためだけではとてもやってられない「務め」である。妻の外に長短期的に愛人を持ったり、一夜の快楽を求めることで無責任に欲望を満たす多くの日本人男性にはとても喜べないシステムだろう。第１妻が第２妻の受け入れを拒み、結婚生活が破綻してしまう例も聞くが、妻と夫が強い信仰心と敬愛の念で結ばれていれば、一夫多妻制はうまく機能するはずだ。妻同士が強い姉妹愛で結ばれたとき、特にうまく行く。モルモン教の一夫多妻制についての調査論文を読んだことがあるが、夫を核に妻とその子供たちが理想的な共同体を形成していた。また、一般的な一夫多妻のイメージに反し、夫を共有する妻たちの方が、夫の留守中の

責任を負い、自分個人の時間を多く持つために夫への依存度が弱く、自立していることが伺えた。

～離婚と夫婦の関係～

ハビーバ中田香織
「アッサラーム」第６５、６６号掲載

離婚

イスラームでは、夫が３度「タラーク（離婚だ）」と妻に対して言えば離婚は成立する。いとも簡単に一方的に離婚が成立するため、不平等、人権無視、などの非難を集めるようだが、事実はちょっと違う。夫が離婚権を握っているため妻は何時でも離婚を言い渡され家を追い出される不安の下に脅えながら生きているようにみられがちだが、実はこの３度の離婚宣言によって窮状に立たされるのはしばしば夫の方である。怒りに任せて「おまえとは離婚だ！」と叫び、冷静になってから自分の言葉に後悔する、ということが多々あるらしい。実際、預言者（彼に平安あれ）の許にも、カッとなって３度離婚を言い渡してしまったがどうしたらいいか、と相談に来る者がいた。たとえ逆上していても自分の言葉に責任を持て、この３度の離婚宣言は熱しやすい男たちにアッラーがそう警告し給うているのではないか。ついでながら、預言者（彼に平安あれ）は、「許されたもののうちアッラーの最も嫌われるものは離婚である。」（アブー・ダーウードの伝える伝承）と言っておられる。

もちろん、この制度を悪用して取っ替え引っ替え妻を娶っては離婚する、という者もいるだろうが、そのような夫からはさっさと別れた方が妻にとっても幸福ではないか、と誰かが書いていたが、考えてみればまったくその通りである。

夫婦の関係

『彼女ら（妻たち）と仲良く暮らせ。たとえ嫌っても、嫌なところにもおそらくアッラーがよいことを多くなし給うのであろうから。』（第４章［婦人］19 節）
『おまえたち自身からおまえたちのために同棲する妻を造り、おまえたちの間に情熱と同情の心を授け給うたのも彼（アッラー）の御しるしのひとつである。…』（第 30 章［ビザンチン］21 節）

「あなたがたのうち最良の者は家族（妻）に最もよくする者ですが、私はあなたがたのうち最も家族によくしています。」（アッ＝ティルミズィーの伝える伝承）
「アッラーと最後の日を信じる者は、隣人を傷つけてはならず、女性には優しく諭すべきである。なぜなら女性は肋骨から作られたからである。肋骨の最も曲がった部分は上部であり、もし無理やり真っすぐにしようとすればそれは折れてしまうだろう。そのままにしておけば曲がったままだろう。それゆえ女性には適度に諭しなさい。」（アル＝ブハーリー、ムスリムの伝える伝承）

以上のクルアーン、ハディースの言葉は、夫婦が優しい情愛によって結ばれるべきものであることを示している。また、女には女の感じ方、考え方があるから、それを無理に変えようとしてはならない、とも預言者（彼に平安あれ）は言われる。

性の喜びは夫婦の間で味わう特権であり、結婚前、結婚外における性交渉はすべて禁じられる。性を罪悪視したキリスト教の歴史においては、非婚が神聖視され、性行為を生殖のみを目的とした行為とみなし、そこから快楽を得ることを忌み嫌ったこともあったが、イスラームにおいては性行為は神が夫婦にのみ許し給うた快楽であり、また神聖な務めであった。「男が自分の妻に近づくとき、彼は２人の天使に守られ、彼はアッラーのための戦士のようである。彼が妻と関係を持つとき、彼の罪は落葉のように落ち、全身洗浄をすれば罪は洗い流される。」（ワサーイルッシーアに集められた伝承）また、別のハディースには、妻と交わることも善行であり、そこにはアッラーからの報償があると述べられている。
妻にとって夫の性的欲望を満たすことは重要な義務の一つである。「もしある女が夫との同衾を拒み、夫が一晩怒りを抱えて過ごせば、天使が朝まで彼女をののしる。」（アル＝ブハーリー、ム

スリムの伝える伝承）、「あなたがたのうちのだれかをある女性が魅惑し、心を迷わせたときには、自分の妻の所に行き、交合しなさい。そうすれば情念を払うことができるでしょう。」（ムスリムの伝える伝承）、「男が自分の欲望を満たすために妻を呼んだときには、たとえカマドに火をくべていても彼の許に行かなくてはならない。」（アッ＝ティルミズイーの伝える伝承）

フェミニストがこれらのハディースを読んだら、イスラームでは女性を単なる性の道具としてしか見ていない、と非難の声を上げるだろうか。しかし、私はこれらのハディースに、なにか素朴なほのぼのとした夫婦愛の形を見る。愛する夫に欲望された妻はうれしさ、恥ずかしさを「務め」という大義名分に隠しながらいそいそと夫の欲求に応える。時にはそこに二人は仲直りの糸口を見い出すかもしれない。

妻が夫の欲望に応えなければならないというと、性行為がもっぱら夫のためにだけあるように誤解されるといけないので付言すると、夫には妻を喜ばせる義務がある。「あなたがたのだれでも、卑しい獣のように妻に飛びかかってはいけません。まず交わりの前に先駆けを送りなさい。」と預言者（彼に平安あれ）は言われ、先駆けとはなんのことですか、と尋ねられると、「接吻と優しい言葉です。」と言われた、という伝承がある。また、妻の許しなく射精直前に体を離すことは禁じられるが、これは妻の喜びを奪うことになりうるからとも考えられる。性行為は生殖のためだけでなく、夫婦の間で楽しむべきものとしてアッラーから与えられているのである。私はこうしたイスラームの性愛観を知って、小説、雑誌、テレビなど巷に氾濫する性のイメージに対して覚えていた嫌悪感を一掃することができた。それまでは性を心のどこかで不浄視していたように思う。切り捨てることのできない人間の動物的側面として疎ましい気持ちがあったように思う。また、性行為に男と女の力関係を見るようなやり切れなさも感じていた。現在、それは一点の曇りもない清らかな性のイメージに取って代った。

～イスラーム社会の現実～

ハビーバ中田香織
「アッサラーム」第６５、６６号掲載

イスラーム圏の女性の現実を取材した本が多く出版されているが、そのほとんどすべてが抑圧された不幸な女性を描いている。外国人が書いたものだけでない、その土地に生まれ育った女性自身が書いたものも同じである。例えば、有名なところでモロッコのファーティマ・メルニッシ、エジプトのナワール・サアダーウィー。彼女たちの描く女性たちの状況は悲惨で目を覆いたくなるものだ。そしてそれはおそらく事実だろう。現実のある一面を映し出しているだろう。しかし、物語を西洋的に判読しようとすると大きな誤解が生じる。メルニッシにしろ、サアダーウィーにしろ確かに現地人ではあるが、その眼差しは欧米人のそれとほとんど変わりない。「ムスリムの眼差し」ではないのである。ムスリムの眼差しを持った者から見れば、物語の主人公とそれを取り巻く人々は残念ながらイスラームから遠く離れた人々であり、彼らの不幸もそこに起因していることは歴然である。
私はエジプトに９カ月、そしてサウディアラビアに２年暮らしたが、私の付き合った女性たちはみな信仰篤い人々だったせいか、誰も夫婦仲がよさそうだったし、こうした本に書かれた出来事を連想させるような横顔を垣間見ることはとうとうなかった。

女性解放の未来

本当の「女性解放」とはなにか。女性が己の女性性を抑圧して「男並み」に社会に進出することが女性解放、男女の平等獲得にはつながらず、却って男性中心の価値観を擁護し自己疎外を進めるだけであることに多くの女性たちは気づいている。しかし、女性の「女性性」の価値が正しく評価され、発揮されることこそが女性解放だとして、一体なにをもって「女性性」と規定すべきか。女性の本来あるべき姿とはなにか。また、今日「女性らしさ」として理解されているものはどこまでが生得的で、どこまでが文化的か。男性優位の社会によって育まれて来た「文化」を剥ぎ取ったとき、どんな女性の「自然」が立ち現れてくるのか。

男女の差異は生得的であると同時に、文化的なものである。女は女と生まれるばかりでなく、女に「なる」のである。男も然り。フェミニストが言うように、おそらく生得的な性徴は性的役割分担を完全に決定づけるものではないだろう。それゆえにこそ、成長の過程で女は女であることを選択し、男は男であることを選択し、それぞれが「男は辛いよ」、「女は辛いよ」と耐え、また相互に思いやりをかけていかなければならないのだろう。文化にも神の意志は働いている。神は女に「女になる」よう命じて給うているのだ。女は女となり、男は男となり、それが自己のアイデンティティーを形成する。そこには実存的不安など入り込む隙はない。そして男となった男と女となった女が対になったときそれぞれの生は最大の安定を得る。それが初めに引用したクルアーンの節『おまえたち自身からおまえたちのために同棲する妻を造り給い、おまえたちの間に情熱と同情の心を設け給うたのも彼（アッラー）の御徴のひとつである。』の言うところの「神の徴」なのだろう。

神を見失った者の不幸は、すべてを疑問視し、すべてを否定し、そのうえですべてを創造しなければならないところにある。女性解放運動は、今日の社会システムが女性に抑圧的であることを指摘し、攻撃することはできても、それを破壊しどこに向かったらよいのか、女性の開花をどのような形で求めたらよいのかを実は知らない。彼らが想像力を最大に駆使して思い描く最も具体的な男女平等社会は、女性がその身体的、精神的女性性を犠牲にすることなく男性と共に賃金労働を担い、一方で男性も家事、育児、老人看護など家事労働に加担する社会、というところだろうか。

イスラームではははっきりと男女の分業を説く。男は糧を得るために働き、女は家を守る。ただし、イスラームは決して近代社会の女性差別を肯定し、今日のイスラーム圏の女性の抑圧的状況を正当化するものではない。男女が分業の上に共生するイスラームの理想社会はいまだかつて存在したことはなく、最もよく実現されていたイスラームの初期時代、預言者（彼に平安あれ）存命の時代においてすらイスラーム前の男尊女卑の傾向は人々の間に根強く残っていた。しかし、たとえイスラームの提出する理想がかつて実現したことなく、依然、理想と現実との間には大きな隔たりがあるとしても、私たちには目指すべきものが確かに見えている。

男は外で働き、女は内で働くというイスラームの原則は、すでに述べたように女性に職業を持つことを禁ずるものではなく、女性の社会参加、自己の実現を阻止するものでもない。男女の世界が分かれているからこそ一層女性には医師、教師など女性にかかわる諸分野での活躍が期待されるし、男の手前を気にすることなくイニシャチブを十分に発揮することもできる。自己の能力を発揮し、自己の可能性を追求する場はなにも収入を伴う職業に限らない。表舞台に立たなくても社会参加は可能なのである。一方、男性に外の労働が課されているといって、それは家事労働一切の免除を意味するものでもない。預言者ムハンマド（彼に平安あれ）は繕い物もされたし、掃除や炊事の手伝いもされたことがハディースに伝えられる。アラブ社会では今日でも食糧の買い出しはしばしば夫の務めである。

長い試行錯誤を抜け、イスラームという解答に行き着いてみると、それまでの自分がいかに迷妄に捕らわれ、いかに病んでいたかがおかしいくらいによくわかる。外国人ムスリムと結婚する若い女性たちの中には喜々として「自由」を捨て、イスラームの「拘束」に身を任す者が少なくない、と初めに書いたが、イスラームの次元に身を移してから決別した次元を振り返ると、何重にも縛られているのは神の意志と戒律の中に身を置く我々ではなく、むしろ限りない欲望の虜となり、無意味な社会規範に拘束され、移り変わりの激しい情報に振り回される「彼ら」の方であることが、己の晴れ晴れした解放感と共に実感される。イスラーム入信を異次元への移行に譬えたのは、こちらと向こうではあまりに物の見え方が異なり、価値の逆転とすら言っていいようなことが起こるからだ。神のしもべであること、神のみのしもべであることを自覚したときこそ真の精神の自立、真の解放は獲得されるに違いない。

２００４年　アラブ イスラーム学院